縁結び

泉鏡花

一

襖（ふすま）を開けて、旅館の女中が、

「旦那（だんな）、」

と上調子（うわっちょうし）の尻上（しりあが）りに云（い）って、坐（すわ）りもやらず莞爾（にっこり）と笑いかける。

「用かい。」

とこの八畳（じょう）で応じたのは三十ばかりの品のいい男で、紺（こん）の勝った糸織（いとおり）の大名縞（だいみょうじま）の袷（あわせ）に、浴衣（ゆかた）を襲（かさ）ねたは、今しがた湯から上ったので、それなりではちと薄（うす）

ら寒し、着換えるも面倒なりで、乱箱に畳んであった着物を無造作に引摺出して、上着だけ引剝いで着込んだ証拠に、襦袢も羽織も床の間を辷って、坐蒲団の傍まで散々のしだらなさ。帯もぐるぐる巻き、胡坐で火鉢に頬杖して、当日の東雲御覧という、ちょっと変った題の、土地の新聞を読んでいた。

その二の面の二段目から三段へかけて出ている、清川謙造氏講演、とあるのがこの人物である。

たとい地方でも何でも、新聞は早朝に出る。その東雲御覧を、今やこれ午後二時。さるにても朝寝のほど、昨日のその講演会の帰途のほども量られる。

「お客様でございますよう。」

と女中は思入たっぷりの取次を、ちっとも先方気が着かずで、つい通りの返事をされたもどかしさに、声で威して甲走る。

吃驚して、ひょいと顔を上げると、横合から硝子窓へ照々と当る日が、片頬へかっと射したので、ぱちぱちと瞬いた。

「そんなに吃驚なさいませんでもようございます。」

となおさら可笑がる。

謙造は一向真面目で、

「何という人だ。名札はあるかい。」

「いいえ、名札なんか用りません。誰も知らないもののない方でございます。ほほほ、」
「そりゃ知らないもののない人かも知れんがね、よそから来た私にゃ、名を聞かなくっちゃ分らんじゃないか、どなただよ。」
と眉を顰める。
「そんな顔をなすったってようございます。ちっとも恐くはありませんわ。今にすぐにニヤニヤとお笑いなさろうと思って。昨夜あんなに晩うくお帰りなさいました癖に、」
「いや、」

と謙造は片頬(かたほ)を撫(な)でて、
「まあ、いいから。誰だというに、取次がお前、そんなに待たしておいちゃ失礼だろう。」
ちと躾(たしな)めるように言うと、一層頬辺(ほっぺた)の色を濃(こ)くして、ますます気勢込(きおいこ)んで、
「何、あなた、ちっと待たして置きます方がかえっていいんでございますよ。昼間ッからあなた、何ですわ。」
と厭(いや)な目つきでまたニヤリで、
「ほんとは夜来る方がいいんだのに。フン、フン、フン、」

突然（いきなり）川柳（せんりゅう）で折紙（おりがみ）つきの、（あり）という鼻をひこつかせて、

「旦那、まあ、あら、まあ、あら良（い）い香（にお）い、何て香水（こうすい）を召（め）したんでございます。フン、」

といい方が仰山（ぎょうさん）なのに、こっちもつい釣込（つりこ）まれて、

「どこにも香水なんぞありはしないよ。」

「じゃ、あの床の間の花かしら、」

と一際（ひときわ）首を突込（つっこ）みながら、

「花といえば、あなたおあい遊ばすのでございましょうね、お通し申しましてもいいんですね。」

「串戯（じょうだん）じゃない。何という人だというに、」

「あれ、名なんぞどうでもよろしいじゃありませんか。お逢（あ）いなされば分るんですもの。」
「どんな人だよ、じれったい。」
「先方（さき）もじれったがっておりましょうよ。」
「婦人（おんな）か。」
と唐突（だしぬけ）に尋（たず）ねた。
「ほら、ほら、」
と袂（たもと）をその、ほらほらと煽（あお）ってかかって、
「ご存じの癖に、」
「どんな婦人だ。」
と尋ねた時、謙造の顔がさっと暗くなった。新聞を

窓へ翳したのである。

「お気の毒様。」

二

「何だ、もう帰ったのか。」

「ええ、」

「だってお気の毒様だと云うじゃないか。」

「ほんとに性急でいらっしゃるよ。誰も帰ったとも何

とも申上げはしませんのに。いいえ、そうじゃないんですよ。お気の毒様だと申しましたのは、あなたはきっと美しい※（ねえ）［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、U+59CA、286-4］さんだと思っておいでなさいましょう。でしょう、でしょう。ところが、どうして、跛（びっこ）で、めっかちで、出尻（でっちり）で、おまけに、」

といいかけて、またフンと嗅（か）いで、

「ほんとにどうしたら、こんな良（い）い匂（におい）が、」

とひょいと横を向いて顔を廊下（ろうか）へ出したと思うと、ぎょッとしたように戸口を開いて、斜（はす）ッかけに、

「あら、まあ！」
「お伺い下すって？」
と内端ながら判然とした清い声が、壁に附いて廊下で聞える。
女中はぼッとした顔色で、
「まあ！」
「お帳場にお待ち申しておりましたんですけれども、おかみさんが二階へ行っていいから、とそうおっしゃって下さいましたもんですから……」
と優容な物腰。大概、蕾から咲きかかったまで、花の香を伝えたから、跛も、めっかちも聞いたであろう

に、仂なく笑いもせなんだ、つつましやかな人柄である。

「お目にかかられますでしょうか。」

「ご勝手になさいまし。」

くるりと入口へ仕切られた背中になると、襖の桟が外れたように、その縦縞が消えるが疾いか、廊下を、ばた、ばた、ばた、どたんなり。

「お入ンなさい、」

「は、」

と幽かに聞いて、火鉢に手をかけ、入口をぐっと仰いで、優い顔で、

「ご遠慮（えんりょ）なく……私は清川謙造です。」

と念のために一ツ名乗る。

「ご免（めん）下さいまし、」

はらりと沈（しず）んだ衣（きぬ）の音で、早（はや）入口へちゃんと両手を。肩がしなやかに袂の尖（さき）、揺（ゆ）れつつ畳（たたみ）に敷いたのは、藤（ふじ）の房（ふさ）の丈長（たけなが）く末濃（すえご）に靡（なび）いた装（よそおい）である。

文金（ぶんきん）の高髷（たかまげ）ふっくりした前髪（まえがみ）で、白茶地（しらちゃじ）に秋の野を織出した繻珍（しゅちん）の丸帯、薄手にしめた帯腰柔（やわらか）に、膝（ひざ）を入口に支（つ）いて会釈（えしゃく）した。背負上（しょいあ）げの緋縮緬（ひぢりめん）こそ脇（わき）あけを漏（も）る雪の膚（はだ）に稲妻（いなづま）のごとく閃（ひらめ）いたれ、愛嬌（あいきょう）の露（つゆ）もしっとりと、ものあわれに俯向（うつむ）いたその姿、片手に

文箱（ふばこ）を捧（ささ）げぬばかり、天晴（あっぱれ）、風采（ふうさい）、池田の宿（しゅく）より朝顔（あさがお）が参って候（そうろう）。

謙造は、一目見て、紛（まご）うべくもあらず、それと知った。

この芸妓（げいしゃ）は、昨夜（ゆうべ）の宴会（えんかい）の余興（よきょう）にとて、催（もよお）しのあった熊野（ゆや）の踊（おどり）に、朝顔に扮（ふん）した美人である。

女主人公（じょしゅじんこう）の熊野を勤（つと）めた婦人は、このお腰元に較（くら）べていたく品形（しなかたち）が劣（おと）っていたので、なぜあの瓢箪（ひょうたん）のようなのがシテをする。根占（ねじめ）の花に蹴落（けお）されて色の無さよ、と怪（あやし）んで聞くと、芸も容色（きりょう）も立優（たちまさ）った朝顔だけれど、——名はお君という——その妓（こ）は熊野を踊（おど）ると、

後できっと煩(わず)らうとの事。仔細(しさい)を聞くと、させる境遇(きょうぐう)であるために、親の死目に合わなかったからであろう、と云った。

　不幸で沈んだと名乗る淵(ふち)はないけれども、孝心なと聞けば懐(なつか)しい流れの花の、旅の衣(ころも)の俤(おもかげ)に立ったのが、しがらみかかる部屋の入口。

　謙造はいそいそと、

「どうして。さあ、こちらへ。」

と行儀(ぎょうぎ)わるく、火鉢を斜(なな)めに押出(おしだ)しながら、

「ずっとお入んなさい、構やしません。」

「はい。」

「まあ、どうしてね、お前さん、驚（おどろ）いた。」と思わず云って、心着くと、お君はげっそりとまた姿が痩（や）せて、極（きま）りの悪そうに小さくなって、

「済みませんこと。」

「いやいや、驚いたって、何に、その驚いたんじゃない。はははは、吃驚（びっくり）したんじゃないよ。まあ、よく来たねえ。」

三

「その事で。ああ、なるほど言いましたよ。」

と火鉢の縁に軽く肱を凭たせて、謙造は微笑みながら、

「本来なら、こりゃお前さんがたが、客へお世辞に云う事だったね。誰かに消ていらっしゃるなぞと思わせぶりを……ちと反対だったね。言いました。ああ、消ている、消ているッて。

そうです、確にそう云った事を覚えているよ。」

お君は敷けと云って差出された座蒲団より膝薄う、その傍へ片手をついたなりでいたのである。が、

薄化粧(うすげしょう)に、口紅(くちべに)濃(こ)く、目のぱっちりした顔を上げて、
「よその方が、誰かに肖ているとお尋ねなさいましたから、あなたがどうお返事を遊ばすかと存じまして、私は極(きまり)が悪うございましたけれども、そっと気をつけましたんですが、こういう処で話をする事ではない。まあまあ、とおっしゃって、それ切りになりましたのでございます。」

謙造は親しげに打頷(うちうなず)き、

「そうそうそう云いました。それが耳に入って気になったかね、そうかい。」

「いいえ、」とまた俯向いて、清らかな手巾(ハンケチ)を、袂の中

で引靡(ひきなび)けて、
「気にいたしますの、なんのって、そういうわけではございません。あの……伺(うかが)いました上で、それにつきまして少々お尋(たず)ねしたいと存じまして。」と俯目(ふしめ)になった、睫毛(まつげ)が濃い。
「聞きましょうとも。その消たという事の次第(わけ)を話すがね、まあ、もっとお寄んなさい。大分(だいぶ)眩(まぶ)しそうだ。どうも、まともに日が射すからね。さあ、遠慮をしないで、お敷きなさい。こうして尋ねて来なすった時はお客様じゃないか。威張(いば)って、威張って。」
「いいえ、どういたしまして、それでは……」

しかし眩(まば)ゆかったろう、下搔(したがい)を引いて座(ざ)をずらした、壁(かべ)の中央(なかば)に柱が許(もと)、肩に浴(あ)びた日を避(よ)けて、朝顔はらりと咲きかわりぬ。

「実はもうちっと間(ま)があると、お前さんが望みとあれば、今夜にもまた昨夜(ゆうべ)の家へ出向いて行って、陽気に一つ話をするんだがね、もう東京へ発程(たっ)んだからそうしてはいられない。」

「はい、あの、私もそれを承りましたので、お帰りになりません前(さき)と存じまして、お宿へ、飛(とん)だお邪魔(じゃま)をいたしましてございますの。」

「宿へお出(いで)は構わんが、こんな処で話してはちと真面

目になるから、事が面倒になりはしないかと思うんだが。

そうかと云って昨夜（ゆうべ）のような、杯盤狼藉（はいばんろうぜき）という場所も困るんだよ。

実は墓参詣（はかまいり）の事だから、」

と云いかけて、だんだん火鉢を手許（てもと）へ引いたのに心着いて、一膝下って向うへ圧（お）して、

「お前さん、煙草（たばこ）は？」

黙（だま）って莞爾（にっこり）する。

「喫（の）むだろう。」

「生意気（なまいき）でございますわ。」

「遠慮なしにお喫り、お喫り。上げようか、巻いたんでよけりや。」

「いいえ、持っておりますよ。」

と帯の処へ手を当てる。

「そこでと、湯も沸いてるから、茶を飲みたければ飲むと……羊羹がある。一本五銭ぐらいなんだが、よければお撮みと……今に何ぞご馳走しようが、まあ、お尋の件を済ましてからの事にしよう、それがいい。」

独りで云って、独りで極めて、

「さて、その事だが、」

「はあ、」

とまた片手をついた。胸へ気が籠ったか、乳のあたりがふっくりとなる。

「余り気を入れると他愛がないよ。ちっとこう更っては取留めのない事なんだから。いいかい、」

ともの優しく念を入れて、

「私は小児の時だったから、唾をつけて、こう引返すと、台なしに汚すと云って厭がったっけ。死んだ阿母が大事にしていた、絵も、歌の文字も、対の歌留多が別にあってね、極彩色の口絵の八九枚入った、綺麗な本の小倉百人一首というのが一冊あった。

その中のね、女用文章の処を開けると……」と畳の

上で、謙造は何にもないのを折返した。

四

「トそこに高髷に結った、瓜核顔（うりざねがお）で品のいい、何とも云えないほど口許（くちもと）の優（やさし）い、目の清（すずし）い、眉の美しい、十八九の振袖（ふりそで）が、裾（すそ）を曳（ひ）いて、嫋娜（すらり）と中腰に立って、左の手を膝の処へ置いて、右の手で、筆を持った小児（こども）の手を持添えて、その小児（こども）の顔を、上から俯目（ふしめ）に覗込（のぞきこ）

むようにして、莞爾していると、小児は行儀よく机に向って、草紙に手習のところなんだがね。

今でも、その絵が目に着いている。衣服の縞柄も真にしなやかに、よくその膚合に叶ったという工合で。小児の背中に、その膝についた手の仕切がなかったら、膚へさぞ移香もするだろうと思うように、ふっくりとなだらかに褄を捌いて、こう引廻した裾が、小児を庇ったように、しんせつに情が籠っていたんだよ。

大袈裟に聞えようけれども。

私は、その絵が大好きで、開けちゃ、見い見いしたもんだから、百人一首を持出して、さっと開ると、ま

たいつでもそこが出る。
　この※（ねえ）［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、U+59CA、295-4］さんは誰だい？と聞くと阿母（おふくろ）が、それはお向うの※（ねえ）［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、U+59CA、295-4］さんだよ、と言い言いしたんだ。
　そのお向うの※（ねえ）［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、U+59CA、295-6］さんというのに、……お前さんが消（に）ているんだがね――まあ、お聞きよ。」
「はあ、」

と瞠（みは）った目がうつくしく、その俤（おもかげ）が映りそう。
「お向うというのは、前に土蔵（どぞう）が二戸前（ふたとまえ）。格子戸（こうしど）に並（なら）んでいた大家（たいけ）でね。私の家なんぞとは、すっかり暮向きが違（ちが）う上に、金貸だそうだったよ。何となく近所との隔（へだ）てがあったし、余り人づきあいをしないといった風で。出入も余計なし、なおさら奥行が深くって、裏はどこの国まで続いているんだか、小児心（こどもごころ）には知れないほどだったから、ついぞ遊びに行った事もなければ、時々、門口じゃ、その※（ねえ）［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、U+59CA、295-14］さんというのの母親に口を利かれる事があっても、こっちは

含羞（はにかん）で遁（に）げ出したように覚えている。

だから、そのお嬢（じょう）さんなんざ、年紀（とし）も違うし、一所に遊んだ事はもちろんなし、また内気な人だったとみえて、余り戸外（そと）へなんか出た事のない人でね、堅（かた）く言えば深閨（しんけい）に何とかだ。秘蔵娘（ひぞっこ）さね。

そこで、軽々しく顔が見られないだけに、二度なり、三度なり見た事のあるのが、余計に心に残っているんで。その女用文章の中の挿画（さしえ）が真物（ほんもの）だか、真物が絵なんだか分らないくらいだった。

しかしどっちにしろ、顔容（かおかたち）は判然（はっきり）今も覚えている。

一日（あるひ）、その母親の手から、娘（むすめ）が、お前さんに、と云っ

て、縮緬の寄切で拵えた、迷子札につける腰巾着を一個くれたんです。そのとき格子戸の傍の、出窓の簾の中に、ほの白いものが見えたよ。紅の色も。蝙蝠を引払いていた棹を抛り出して、内へ飛込んだ、その嬉しさッたらなかった。夜も抱いて寝て、あけるとその百人一首の絵の机の上へのっけたり、立っている娘の胸の処へ置いたり、胸へのせると裾までかくれたよ。

　惜い事をした。その巾着は、私が東京へ行っていた時分に、故郷の家が近火に焼けた時、その百人一首も一所に焼けたよ。」

「まあ……」

とはかなそうに、お君の顔色が寂(さび)しかった。

「迷子札は、金(かね)だから残ったがね、その火事で、向うの家(うち)も焼けたんだ。今度通ってみたが、町はもう昔の俤もない。煉瓦造(れんがづく)りなんぞ建って開けたようだけれど、大きな樹がなくなって、山がすぐ露出(むきだ)しに見えるから、かえって田舎(いなか)になった気がする、富士の裾野(すその)に煙突(えんとつ)があるように。

向うの家も、どこへ行きなすったかね、」

と調子が沈んで、少し、しめやかになって、

「もちろんその娘さんは、私がまだ十(と)ウにならない内

に亡(な)くなったんだ。——
　産後だと言います……」
「お産をなすって？」
と俯目でいた目を眸(みひら)いたが、それがどうやらうるんでいたので。
　謙造はじっと見て、傾(かたむ)きながら、
「一人娘(ひとりむすめ)で養子をしたんだね、いや、その時は賑(にぎや)かだッけ。」
　と陽気な声。

五

「土蔵がずッしりとあるだけに、いつも火の気のないような、しんとした、大きな音じゃ釜（かま）も洗わないといった家が、夜になると、何となく灯（あかり）がさして、三味線（しゃみせん）太鼓（たいこ）の音がする。時々どっと山颪（やまおろし）に誘われて、物凄（ものすご）いような多人数（たにんず）の笑声（わらいごえ）がするね。

何ッて、母親（おふくろ）の懐（ふところ）で寝ながら聞くと、これは笑っているばかり。父親（おやじ）が店から声をかけて、魔物が騒ぐんだ、恐（こわ）いぞ、と云うから、乳へ顔を押着（おッつ）けて息を殺

して寝たっけが。

三晩ばかり続いたよ。　田地田畠持込で養子が来たんです。

その養子というのは、日にやけた色の赤黒い、巌乗づくりの小造な男だっけ。　何だか目の光る、ちときよときよとする、　性急な人さ。

性急なことをよく覚えている訳は、　桃を上げるから一所においで。　※［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）」、「姉」の正字」、U+59CA、299-2］さんが、　そう云った、　坊を連れて行けというからと、　私を誘ってくれたんだ。

例の巾着をつけて、いそいそ手を曳(ひ)かれて連れられたんだが、髪を綺麗(きれい)に分けて、帽子(ぼうし)を冠(かぶ)らないで、確かその頃流行(はや)ったらしい。手甲(てっこう)見たような、腕へだけ嵌(は)まる毛糸で編んだ、萌黄(もえぎ)の手袋を嵌めて、赤い襯衣(しゃつ)を着て、例の目を光らしていたのさ。私はその娘さんが、あとから来るのだろう、来るのだろうと、見返り見返りしながら手を曳かれて行ったが、なかなか路(みち)は遠かった。

　途中で負(おぶ)ってくれたりなんぞして、何でも町尽(まちはずれ)へ出て、寂(さびし)い処を通って、しばらくすると、大きな榎(えのき)の下に、清水(しみず)が湧(わ)いていて、そこで冷い水を飲んだ気

がする。清水には柵（さく）が結（ゆ）ってあってね、昼間だったから、点（つ）けちゃなかったが、床几（しょうぎ）の上に、何とか書いた行燈（あんどん）の出ていたのを覚えている。

　そこでひとしきり、人通りがあって、もうちと行くと、またひっそりして、やがて大きな桑畠（くわばたけ）へ入って、あの熟（じゅく）した桑の実を取って食べながら通ると、二三人葉を摘（つ）んでいた、田舎（いなか）の婦人があって、養子を見ると、慌（あわ）てて襷（たすき）をはずして、お辞儀（じぎ）をしたがね、そこが養子の実家だった。

　地続きの桃畠（ももばたけ）へ入ると、さあ、たくさん取れ、今じゃ、※（ねえ）［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）」、「姉」の

正字」、U+59CA、300-2］さんのものになったんだから、いつでも来るがいい。まだ、瓜もある、西瓜も出来る、と嬉しがらせて、どうだ。坊は家の児にならんか、※［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、U+59CA、300-4］さんがいい児にするぜ。

厭か、爺婆が居るから。……そうだろう。あんな奴は、今におれがたたき殺してやろう、と恐ろしく意気込んで、飛上って、高い枝の桃の実を引もぎって一個くれたんだ。

帰途は、その清水の処あたりで、もう日が暮れた。婆がやかましいから急ごう、と云うと、髪をばらりと

振(ふ)って、私の手をむずと取って駆出(かけだ)したんだが、引立(ひった)てた腕(うで)が捥(も)げるように痛む、足も宙(ちゅう)で息が詰(つま)った。養子は、と見ると、目が血走っていようじゃないか。泣出したもんだから、横抱(よこだき)にして飛んで帰ったがね。私は何だか顔はあかし、天狗(てんぐ)にさらわれて行ったような気がした。袂に入れた桃の実は途中で振落(ふりおと)して一つもない。

　そりゃいいが、半年経(た)たない内にその男は離縁(りえん)になった。

　だんだん気が荒(あら)くなって、※(ねえ)［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、U+59CA、301-1］さ

んのたぶさを摑んで打った、とかで、田地は取上げ、という評判でね、風の便りに聞くと、その養子は気が違ってしまったそうだよ。

その後、晩方の事だった。私はまた例の百人一首を持出して、おなじ処を開けて腹這いで見ていた。その絵を見る時は、きっと、この※［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、U+59CA、301-5］さんは誰？　と云って聞くのがお極りのようだったがね。また尋ねようと思って、阿母は、と見ると、秋の暮方の事だっけ。ずっと病気で寝ていたのが、ちと心持がよかったか、床を出て、二階の臂かけ窓に袖をかけて、

じっと戸外(そと)を見てうっとり見惚(みと)れたような様子だから、遠慮(えんりょ)をして、黙って見ていると、どうしたか、ぐッと肩を落して、はらはらと涙(なみだ)を落した。

どうしたの？　と飛ついて、鬢(びん)の毛のほつれた処へ、私の頬(ほお)がくっついた時、と見ると向うの軒下(のきした)に、薄く青い袖をかさねて、しょんぼりと立って、暗くなった山の方を見ていたのがその人で、」

と謙造は面(おもて)を背(そむ)けて、硝子窓(がらすまど)。そのおなじ山が透(す)かして見える。日は傾(かたむ)いたのである。

六

「その時は、艶々（つやつや）した丸髷（まげ）に、浅葱絞（あさぎしぼ）りの手柄（てがら）をかけていなすった。ト私が覗（のぞ）いた時、くるりと向うむきになって、格子戸へ顔をつけて、両袖でその白い顔を包んで、消えそうな後姿で、ふるえながら泣（な）きなすったっけ。

桑の実の小母（おば）さん許（とこ）へ、※（ねえ）［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）」、「姉」の正字」、U+59CA、302-8］さんを連れて行ってお上げ、坊（ぼう）やは知ってるね、と云って、

阿母は横抱に、しっかり私を胸へ抱いて、
こんな、お腹をして、可哀相に……と云うと、熱い
珠が、はらはらと私の頸へ落ちた。」
と見ると手巾の尖を引啣えて、お君の肩はぶるぶる
と動いた。白歯の色も涙の露、音するばかり戦いて。
言を折られて、謙造は溜息した。
「あなた、もし、」
と涙声で、つと、腰を浮かして寄って、火鉢にかけ
た指の尖が、真白に震えながら、
「その百人一首も焼けてなくなったんでございますか。
私、私は、お墓もどこだか存じません。」

と引出して目に当てた襦袢の袖の燃ゆる色も、紅寒き血に見える。

謙造は太息ついて、

「ああ、そうですか、じゃあ里に遣られなすったお娘なんですね。音信不通という風説だったが、そうですか。――いや、」

と言を改めて、

「二十年前の事が、今目の前に見えるようだ。お祭し申します。

私も、その頃阿母に別れました。今じゃ父親も居らんのですが、しかしまあ、墓所を知っているだけでも、

あなたより増かも知れん。
そうですか。」
また歎息して、
「お墓所もご存じない。」
「はい、何にも知りません。あなたは、よく私の両親の事をご存じでいらっしゃいます、せめて、その、その百人一首でも見とうござんすのにね。……」
と言も乱れて、
「墓の所をご存じではござんすまいか。」
「……困ったねえ。門徒宗でおあんなすったっけが、トばかりじゃ……」

と云い淀むと、堪りかねたか、蒲団の上へ、はっと突俯して泣くのであった。

謙造は目を瞑って腕組したが、おお、と小さく膝を叩いて、

「余りの事のお気の毒さ。肝心の事を忘れました。あなた、あなた、」

と二声に、引起された涙の顔。

「こっちへ来てご覧なさい。」

謙造は座を譲って、

「こっちへ来て、ここへ、」

と指さされた窓の許へ、お君は、夢中のように、つ

かつか出て、硝子窓の敷居(しきい)に縋(すが)る。

謙造はひしと背後(うしろ)に附添(つきそ)い、

「松葉越(まつばごし)に見えましょう。あの山は、それ茸狩(たけがり)だ、彼岸(ひがん)だ、二十六夜待(やまち)だ、月見だ、と云って土地の人が遊山(ゆさん)に行く。あなたも朝夕見ていましょう。あすこにね、私の親たちの墓があるんだが、その居(い)まわりの回向堂(えこうどう)に、あなたの阿母(おっか)さんの記念(かたみ)がある。」

「ええ。」

「確(たしか)にあります、一昨日(おととい)も私が行って見て来たんだ。そこへこれからお伴(とも)をしよう、連れて行って上げましょう、すぐに、」

と云って勇（いさ）んだ声で、

「お身体（からだ）の都合（つごう）は、」

その花やかな、寂（さみ）しい姿をふと見つけた。

「しかし、それはどうとも都合（つごう）が出来よう。」

「まあ、ほんとうでございますか。」

といそいそ裳（もすそ）を靡（なび）かしながら、なおその窓を見入ったまま、敷居の手を離さなかったが、謙造が、脱（ぬ）ぎ棄（す）てた衣服（きもの）にハヤ手をかけた時であった。

「あれえ」と云うと畳にばったり、膝を乱して真蒼（まっさお）になった。

窓を切った松の樹の横枝へ、お君の顔と正面に、山

を背負って、むずと摑まった、大きな鳥の翼があった。狸のごとき眼の光、灰色の胸毛の逆立ったのさえ数えられる。

「梟だ。」

とからからと笑って、帯をぐるぐると巻きながら、

「山へ行くのに、そんなものに驚いちゃいかんよ。そう極ったら、急がないとまた客が来る。あなた支度をして。山の下まで車だ。」と口でも云えば、手も叩く、謙造の忙がしさ。その足許にも鳥が立とう。

七

「さっきの、さっきの、」

と微笑（ほほえ）みながら、謙造は四辺（あたり）を眴（みまわ）し、

「さっきのが……声だよ。お前さん、そう恐（こわ）がっちゃいかん。一生懸命（いっしょうけんめい）のところじゃないか。」

「あの、梟が鳴くんですかねえ。私はまた何でしょうと吃驚（びっくり）しましたわ。」

と、寄添（よりそ）いながら、お君も莞爾（にっこり）。

二人は麓（ふもと）から坂を一ツ、曲ってもう一ツ、それから

ここの天神の宮を、梢（こずえ）に仰（あお）ぐ、石段を三段、次第に上って来て、これから隧道（トンネル）のように薄暗い、山の狭間（はざま）の森の中なる、額堂（がくどう）を抜けて、見晴しへ出て、もう一坂越して、草原を通ると頂上の広場になる。かしこの回向堂を志して、ここまで来ると、あんなに日当りで、車は母衣（ほろ）さえおろすほどだったのが、梅雨期（つゆどき）のならい、石段の下の、太鼓橋（たいこばし）が掛（かか）った、乾（かわ）いた池の、葉ばかりの菖蒲（あやめ）がざっと鳴ると、上の森へ、雲がかかったと見るや、こらえずさっと降出したのに、ざっと一濡（ひとぬ）れ。石段を駆（か）けて上（のぼ）って、境内（けいだい）にちらほらとある、青梅（あおうめ）の中を、裳（もすそ）はらはらでお君が潜（くぐ）って。

さてこの額堂へ入って、一息ついたのである。

「暮れるには間(ま)があるだろうが、暗くなったもんだから、ここを一番と威(おど)すんだ。悪い梟さ。この森にゃ昔からたくさん居る。良(い)い月夜なんぞに来ると、身体(からだ)が蒼(あお)い後光がさすように薄ぼんやりした態(なり)で、樹の間にむらむら居る。

それをまた、腕白(わんぱく)の強がりが、よく賭博(かけ)なんぞして、わざとここまで来たもんだからね。梟は仔細(しさい)ないが、弱るのはこの額堂にゃ、古(ふるく)から評判の、鬼(おに)、」

「ええ、」

とまた擦寄(すりよ)った。謙造は昔懐(むかしなつか)しさと、お伽話(とぎばなし)で

もする気とで、うっかり言ったが、なるほどこれは、

と心着いて、急いで言い続けて、

「鬼の額だよ、額が上(あが)っているんだよ。」

「どこにでございます。」

と何(なん)にか押向(おしむ)けられたように顔を向ける。

「何、何でもない、ただ絵なんだけれど、小児(こども)の時は恐かったよ、見ない方がよかろう。ははは、そうか、見ないとなお恐(おそろ)しい、気が済まない、とあとへ残るか、それその額さ。」

と指(ゆびさ)したのは、蜘蛛(くも)の囲(い)の間にかかって、一面漆(うるし)を塗ったように古い額の、胡粉(ごふん)が白くくっきりと残っ

た、目隈（めぐま）の蒼ずんだ中に、一双虎（いっそうとら）のごとき眼（まなこ）の光、凸（なかだか）に爛々（らんらん）たる、一体の般若（はんにゃ）、被（かずき）の外へ躍出（おどりい）でて、虚空（こくう）へさっと撞木（しゅもく）を楫（かじ）、渦（うずま）いた風に乗って、緋（ひ）の袴（はかま）の狂（くる）いが火焔（ほのお）のように飜（ひるがえ）ったのを、よくも見ないで、

「ああ。」と云うと、ひしと謙造の胸につけた、遠慮（えんりょ）の眉は間（あわい）をおいたが、前髪は衣紋（えもん）について、襟（えり）の雪がほんのり薫（かお）ると、袖に縋った手にばかり、言い知らず力が籠（こも）った。

謙造は、その時はまださまでにも思わずに、

「母様（おっかさん）の記念（かたみ）を見に行くんじゃないか、そんなに弱くっては仕方がない。」

と半ば励ます気で云った。

「いいえ、母様が活きていて下されば、なおこんな時は甘えますわ。」

と取縋っているだけに、思い切って、おさないものいい。

何となく身に染みて、

「私が居るから恐くはないよ。」

「ですから、こうやって、こうやって居れば恐くはないのでございます。」

思わず背に手をかけながら、謙造は仰いで額を見た。

雨の滴々しとしとと屋根を打って、森の暗さが廂

を通し、翠(みどり)が黒く染込(しみこ)む絵の、鬼女(きじょ)が投げたる被(かずき)を背(せ)にかけ、わずかに烏帽子(えぼし)の頭(かしら)を払(はら)って、太刀(たち)に手をかけ、腹巻したる体(たい)を斜(なな)めに、ハタと睨(にら)んだ勇士の面(おもて)。と顔を合わせて、フトその腕(かいな)を解いた時。

小松に触(さわ)る雨の音、ざらざらと騒がしく、番傘(ばんがさ)を低く翳(かざ)し、高下駄(たかげた)に、濡地(ぬれつち)をしゃきしゃきと蹈(ふ)んで、からずね二本、痩せたのを裾端折(すそはしより)で、大股(おおまた)に歩行(ある)いて来て額堂へ、頂(いただき)の方の入口から、のさりと入ったものがある。

八

「やあ、これからまたお出（いで）かい。」
と腹の底から出るような、奥底のない声をかけて、番傘を横に開いて、出した顔は見知越（みしりごし）。一昨日（おととい）もちょっと顔を合わせた、峰（みね）の回向堂の堂守で、耳には数珠（じゅず）をかけていた。仁右衛門（にえもん）といって、いつもおんなじ年の爺（おやじ）である。
　その回向堂は、また庚申堂（こうしんどう）とも呼ぶが、別に庚申を祭ったのではない。さんぬる天保（てんぽう）庚申年に、山を開い

て、共同墓地にした時に、居まわりに寺がないから、この御堂を建立して、家々の位牌を預ける事にした、そこで回向堂とも称うるので、この堂守ばかり、別に住職の居室もなければ、山法師も宿らぬのである。

「また、東京へ行きますから、もう一度と思って来ました。」

と早、離れてはいたが、謙造は傍なる、手向にあらぬ花の姿に、心置かるる風情で云った。

「よく、参らっしゃる、ちとまた休んでござれ。」

「ちょっと休まして頂くかも知れません。爺さんは、」

「私かい。講中にちっと折込みがあって、これから

通夜じゃ、南無妙、」

と口をむぐむぐさしたが、

「ははは、私ぐらいの年の婆さまじゃ、お目出たい事いの。位牌になって嫁入りにござらっしゃる、南無妙。戸は閉めてきたがの、開けさっしゃりませ、掛金も何にもない、南無妙、」

と二人を見て、

「ははあ、傘なしじゃの、いや生憎の雨、これを進ぜましょ。持ってござらっしゃい。」

とばッさり窄める。

「何、構やしないよ。」

「うんにゃよ、お前さまは構わっしゃらいでも、ははは、それ、そちらの※（ねえ）［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）」、「姉」の正字」、U+59CA、312-5］さんが濡れるわ、さあさあ、ささっしゃい。」

「済みませんねえ、」

と顔を赤らめながら、

「でも、お爺さん、あなたお濡れなさいましょう。」

「私は濡れても天日（てんぴ）で干すわさ。いや、またまこと困れば、天神様の神官殿（かんぬしどの）別懇（べっこん）じゃ、宿坊（しゅくぼう）で借りて行く……南無妙、」

と押（おっ）つけるように出してくれる。

捧(ささ)げるように両手で取って、

「大助(おおだすか)りです、ここに雨やみをしているもいいが、この人が、」

と見返って、莞爾(にっこり)して、

「どうも、嬰児(ねんね)のように恐がって、取って食われそうに騒ぐんで、」

と今の姿を見られたろう、と極(きまり)の悪さにいいわけする。

お君は俯向(うつむ)いて、紫(むらさき)の半襟(はんえり)の、縫(ぬい)の梅(うめ)を指でちょいと。

仁右衛門(にえもん)、はッはと笑い、

「おお、名物の梟かい。」

「いいえ、それよりか、そのもみじ狩（がり）の額の鬼が、」

「ふむ、」

と振仰いで、

「これかい、南無妙。これは似たような絵じゃが、余吾将軍維茂（よごしょうぐんこれもち）ではない。見さっしゃい。烏帽子素袍大紋（えぼしすおうだいもん）じゃ。手には小手（こて）、脚（あし）にはすねあてをしているわ……大森彦七（おおもりひこしち）じゃ。南無妙、」

と豊かに目を瞑（つぶ）って、鼻の下を長くしたが、

「山頬（やまぎわ）の細道を、直様（すぐさま）に通るに、年の程十七八計（ばかり）なる女房（にょうぼう）の、赤き袴に、柳裏（やなぎうら）の五衣（いつつぎぬ）着て、鬢深（びんふか）く鍛（そ）ぎた

るが、南無妙。

山の端（は）の月に映（えい）じて、ただ独り彳（たたず）みたり。……これからよ、南無妙。

女ちと打笑うて、嬉（うれ）しや候。さらば御桟敷（おんさじき）へ参り候（そうら）わんと云いて、跡（あと）に付きてぞ歩みける。羅綺（らき）にだも不勝姿（たえざるすがた）、誠（まこと）に物痛（ものいたわ）しく、まだ一足も土をば不蹈人（ふまざるひと）よと覚えて、南無妙。

彦七不怺（こらえず）、余（あまり）に露（つゆ）も深く候えば、あれまで負進（おいまいら）せ候わんとて、前に跪（ひざまず）きたれば、女房すこしも不辞（じせず）、便（びん）のう、いかにかと云いながら、やがて後（うしろ）にぞ靠（よりかか）りける、南無妙。

白玉か何ぞと問いし古えも、かくやと思知れつつ、嵐のってに散花の、袖に懸るよりも軽やかに、梅花の匂なつかしく、蹈足もたどたどしく、心も空に浮れつつ、半町ばかり歩みけるが、南無妙。月すこし暗かりける処にて、南無妙、さしも厳しかりけるこの女房、南無妙。」

といいいい額堂を出ると、雨に濡らすまいと思ったか、数珠を取って。頂いて懐へ入れたが、身体は平気で、石段、てく、てく。

二(フタツ)ノ眼(マナコ)ハ朱(シュ)ヲ解(トイ)テ。鏡ノ面(オモテ)ニ洒(ソソ)ゲルガゴトク。上下(ウエシタ)歯クイ違(チゴウ)テ。口脇(クチワキ)耳ノ根マデ広ク割(サ)ケ。眉(マユ)ハ漆(ウルシ)ニテ百入塗(モモシオヌリ)タルゴトクニシテ。額ヲ隠シ。振分髪(フリワケガミ)ノ中ヨリ。五寸計(ゴスンバカリ)ナル犢(コウシ)ノ角。鱗(ウロコ)ヲカズイテ生出(おいい)でた、長(たけ)八尺(しゃく)の鬼が出ようかと、汗(あせ)を流して聞いている内、月チト暗カリケル処ニテ、仁右衛門が出て行った。まず、よし。お君は怯(おび)えずに済んだが、ひとえに梟の声に耳を澄まして、あわれに物寂(ものさびし)い顔である。

「さ、出かけよう。」

と謙造はもうここから傘（からかさ）ばッさり。

「はい、あなた飛んだご迷惑（めいわく）でございます。」

「私はちっとも迷惑な事はないが、あなた、それじゃいかん。路（みち）はまだそんなでもないから、跣足（はだし）には及（およ）ぶまいが、裾をぐいとお上（あ）げ、構わず、」

「それでも、」

「うむ、構うもんか、いまの石段なんぞ、ちらちら引絡（ひっから）まって歩行悪（あるきにく）そうだった。

　極（きまり）の悪いことも何にもない。誰も見やしないから、これから先は、人ッ子一人居やしない、よ、そうおし、」

「でも、余(あんま)り、」
片褄(かたづま)取って、その紅(くれない)のはしのこぼれたのに、猶予(ためら)って恥(はずか)しそう。
「だらしがないから、よ。」
と叱(しか)るように云って、
「母様(おっかさん)に逢いに行くんだ。一体、私の背(せなか)に負(お)んぶをして、目を塞(ふさ)いで飛ぶところだ。構うもんか。さ、手を曳(ひ)こう、辷(すべ)るぞ。」
と言った。暮れかかった山の色は、その滑(なめら)かな土に、お君の白脛(しらはぎ)とかつ、緋(ひ)の裳(もすそ)を映した。二人は額堂を出たのである。

「ご覧、目の下に遠く樹立（こだち）が見える、あの中の瓦屋根（かわらやね）が、私の居る旅籠（はたご）だよ。」

崕（がけ）のふちで危（あぶな）っかしそうに伸上（のびあが）って、

「まあ、直（じき）そこでございますね。」

「一飛（ひとッと）びだから、梟が迎いに来たんだろう。」

「あれ。」

「おっと……番毎怯（ばんごとおび）えるな、しっかりと掴（つかま）ったり……

……」

「あなた、邪慳（じゃけん）にお引張（ひッぱ）りなさいますな。綺麗（きれい）な草を、もうちっとで蹈（ふ）もうといたしました。可愛（かわい）らしい菖蒲（あやめ）ですこと。」

「紫羅傘だよ、この山にはたくさん咲く［＃「咲く」は底本では「吹く」］。それ、一面に。」

星の数ほど、はらはらと咲き乱れたが、森が暗く山が薄鼠になって濡れたから、しきりなく梟の声につけても、その紫の俤が、燐火のようで凄かった。

辿る姿は、松にかくれ、草にあらわれ、坂に沈み、峰に浮んで、その峰つづきを畝々と、漆のようなのと、真蒼なると、赭のごときと、中にも雪を頂いた、雲いろいろの遠山に添うて、ここに射返されたようなお君の色。やがて傘一つ、山の端に大な蕈のようになった時、二人はその、さす方の、庚申堂へ着いたのであ

る。
　と不思議な事には、堂の正面へ向った時、仁右衛門は掛金はないが開けて入るように、と心着けたのに、雨戸は両方へ開いていた。お君は後に、御母様がそうしておいたのだ、と言ったが、知らず堂守の思違いであったろう。
　框がすぐに縁で、取附きがその位牌堂。これには天井から大きな白の戸帳が垂れている。その色だけ仄に明くって、板敷は暗かった。
　左に六畳ばかりの休息所がある。向うが破襖で、その中が、何畳か、仁右衛門堂守の居る処。勝手口は

裏にあって、台所もついて、井戸（いど）もある。

が謙造の用は、ちっともそこいらにはなかったので。前へ入って、その休息所の真暗な中を、板戸漏（も）る明（あかり）を見当に、がたびしと立働いて、町に向いた方の雨戸をあけた。

横手にも窓があって、そこをあけると今の、その雪をいただいた山が氷（こおり）を削（けず）ったような裾を、紅、緑、紫の山でつつまれた根まで見える、見晴の絶景ながら、窓の下がすぐ、ばらばらと墓であるから、また怯（おび）えようと、それは閉めたままでおいたのである。

十

その間に、お君は縁側に腰をかけて、裾を捻（ねじ）るようにして懐（ふところ）がみで足を拭（ぬぐ）って、下駄（げた）を、謙造のも一所に拭（ふ）いて、それから穿直（はきなお）して、外へ出て、広々とした山の上の、小さな手水鉢（ちょうずばち）で手を洗って、これは手巾（ハンケチ）で拭（ぬぐ）って、裾をおろして、一つ揺直（ゆすりなお）して、下褄（したづま）を掻込（かいこ）んで、本堂へ立向って、ト頭（つむり）を下げたところ。

「こちらへお入り、」

と、謙造が休息所で声をかける。

お君がそっと歩行（ある）いて行くと、六畳の真中に腕組（うでぐみ）をして坐（すわ）っていたが、

「まあお坐んなさい。」

と傍（かたわら）へ坐らせて、お君が、ちゃんと膝をついた拍子（ひょうし）に、何と思ったか、ずいと立ってそこらを見廻したが、横手（よこって）のその窓に並（なら）んだ二段に釣（つ）った棚（たな）があって、火鉢（ひばち）燭台（しょくだい）の類、新しい卒堵婆（そとば）が二本ばかり。下へ突込んで、鼠の噛（かじ）った穴から、白い切（きれ）のはみ出した、中には白骨でもありそうな、薄気味の悪い古葛籠（ふるつづら）が一折。その中の棚に斜（はす）っかけに乗せてあった経机（きょうづくえ）ではない

小机の、脚を扶（えぐ）って満月を透（すか）したはいいが、雲のかかったように虫蝕（むしくい）のあとのある、塗（ぬ）ったか、古びか、真黒な、引出しのないのに目を着けると……

「有った、有った。」

と嬉しそうにつと寄って、両手でがさがさと引き出して、立直って持って出て、縁側を背後（うしろ）に、端然（きちん）と坐った、お君のふっくりした衣紋（えもん）つきの帯の処へ、中腰になって舁据（かきす）えて置直すと、正面を避（さ）けて、お君と互違（たがいちが）いに肩を並べたように、どっかと坐って、

「これだ。これがなかろうもんなら、わざわざ足弱を、暮方（くれがた）にはなるし、雨は降るし、こんな山の中へ連れて

来て、申訳のない次第だ。

薄暗くってさっきからちょっと見つからないもんだから、これも見た目の幻(まぼろし)だったのか、と大抵(たいてい)気を揉(も)んだ事じゃない。

お君さん、」

と云って、無言ながら、懐(なつか)しげなその美い、そして恍惚(うっとり)となっている顔を見て、

「その机だ。お君さん、あなたの母様(おっかさん)の記念(かたみ)というのは、……

こういうわけだ。また恐(こわ)がっちゃいけないよ。母様(おっかさん)の事なんだから。

いいかい。
一昨日ね。私の両親の墓は、ついこの右の方の丘の松蔭にあるんだが、そこへ参詣をして、墳墓の土に、薫の良い、菫の花が咲いていたから、東京へ持って帰ろうと思って、三本ばかり摘んで、こぼれ松葉と一所に紙入の中へ入れて。それから、父親の居る時分、連立って阿母の墓参をすると、いつでも帰りがけには、この仁右衛門の堂へ寄って、世間話、お祖師様の一代記、時によると、軍談講釈、太平記を拾いよみに諳記でやるくらい話がおもしろい爺様だから、日が暮れるまで坐り込んで、提灯を借りて帰ることなんぞあっ

た馴染だから、ここへ寄った。

いいお天気で、からりと日が照っていたから、この間中の湿気払いだと見えて、本堂も廊下も明っ放し……で誰も居ない。

座敷のここにこの机が出ていた。

机の向うに薄くこう婦人が一人、」

お君はさっと蒼くなる。

「一生懸命にお聞きよ。それが、あなたの母様だったんだから。

高髷を俯向けにして、雪のような頸脚が見えた。手をこうやって、何か書ものをしていたろう。紙はあっ

たが、筆は持っていたか、そこまでは気がつかないが、現に、そこに、あなたとちょうど向い合せの処、」
正面の襖は暗くなった、破れた引手に、襖紙の裂けたのが、ばさりと動いた。お君は堅くなって真直に、そなたを見向いて、瞬もせぬのである。
「しっかりして、お聞き、恐くはないから、私が居るから、」と謙造は、自分もちょいと本堂の今は煙のように見える、白き戸帳を見かえりながら、
「私がそれを見て、ああ、消たようなとぞっとした時、そっと顔を上げて、莞爾したのが、お向うのその※［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）、「姉」の正字」、

U+59CA、322-6］さんだ、百人一首の挿画（さしえ）にそツくり。
はツと気がつくと、もう影も姿もなかった。
私は、思わず飛込んで、その襖を開けたよ。
がらん堂にして仁右衛門も居らず。懐しい人だけれども、そこに、と思うと、私もちと居なすった幻のあとへは、第一なまぐさを食う身体（からだ）だし、もったいなくッて憚（はばか）ったから、今、お君さん、お前が坐っているそこへ坐ってね、机に凭（もた）れて、」
と云う時、お君はその机にひたと顔をつけて、うつぶしになった。あらぬ俤（おもかげ）とどめずや、机の上は煤（すす）だらけである。

「で、何となく、あの二階と軒とで、泣きなすった、その時の姿が、今さしむかいに見えるようで、私は自分の母親の事と一所に、しばらく人知れず泣いて、ようよう外へ出て、日を見て目を拭いた次第だった。翌晩、朝顔を踊った、お前さんを見たんだよ。目前を去らない娘さんにそっくりじゃないか。そんな話だから、酒の席では言わなかったが、私はね、さっきお前さんがお出での時、女中が取次いで、女の方だと云った、それにさえ、ぞっとしたくらい、まざまざとここで見たんだよ。

しかしその机は、昔からここにある見覚えのある、

庚申堂はじまりからの附道具(つきどうぐ)で、何もあなたの母様(おっかさん)の使っておいでなすったのを、堂へ納めたというんじゃない。

それがまたどうして、ここで幻を見たろうと思うと……こうなんだ。

私の母親の亡くなったのは、あなたの母親(おっかさん)より、二年ばかり前だったろう。

新盆(にいぼん)に、切籠(きりこ)を提(さ)げて、父親(おやじ)と連立って墓参(はかまいり)に来たが、その白張(しらはり)の切籠は、ここへ来て、仁右衛門爺様(じいさま)に、アノ威張(いば)った髯題目(ひげだいもく)、それから、志す仏の戒名(かいみょう)、進上(しんじょう)から、供養の主(ぬし)、先祖代々の精霊(しょうりょう)と、一個一個(ひとつひとつ)

に書いて貰うのが例でね。

内ばかりじゃない、今でも盆にはそうだろうが、よその爺様婆様、切籠持参は皆そうするんだっけ。

その年はついにない、どうしたのか急病で、仁右衛門が呻いていました。

さあ、切籠が迷った、白張でうろうろする。

ト同じ燈籠を手に提げて、とき色の長襦袢の透いて見える、羅の涼しい形で、母娘連、あなたの祖母と二人連で、ここへ来なすったのが、※［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）」、「姉」の正字」、U+59CA、324-7］さんだ。

やあ、占（し）めた、と云うと、父親（おやじ）が遠慮なしに、お絹（きぬ）さん――あなた、母様（おっかさん）の名は知っているかい。」

突俯（つっぷ）したまま、すねたように頭（かぶり）を振った。

「お願（ねがい）だ、お願だ。精霊大まごつきのところ、お馴染の私（わし）が媽々（かかあ）の門札（かどふだ）を願います、と燈籠を振廻（ふりま）わしたもんです。

　母様（おっかさん）は、町内評判の手かきだったからね、それに大勢居る処だし、祖母（おばあ）さんがまた、ちっと見せたい気もあったかして、書いてお上げなさいよ、と云ってくれたもんだから、扇（おうぎ）を畳（たた）んで、お坐んなすったのが――その机です。

これは、祖父(じい)の何々院(なになにいん)、これは婆さまの何々信女(なになにしんにょ)、
そこで、これへ、媽々(かかあ)の戒名を、と父親(おやじ)が燈籠を出した時。
(母様(おっかさん)のは、)と傍(そば)に畏(かしこま)った私を見て、
(謙ちゃんが書くんですよ、)
とそう云っておくんなすってね、その机の前へ坐らせて、」
と云う時、謙造は声が曇った。
「すらりと立って、背後(うしろ)から私の手を柔(やわら)かく筆を持添えて……
おっかさん、と仮名(かな)で書かして下さる時、この襟(えり)へ、」

と、しっかりと腕を組んで、

「はらはらと涙（なみだ）を落しておくんなすった。父親（おやじ）は墨（すみ）をすりながら、伸上（のびあが）って、とその仮名を読んで……

おっかさん、」

いいかけて謙造は、ハッと位牌堂の方を振向いてぞっとした。自分の胸か、君子の声か、幽（かすか）に、おっかさんと響いた。

ヒイと、堪（こら）えかねてか、泣く声して、薄暗がりを一つあおって、白い手が膝の上へばたりと来た。突俯（つっぷ）したお君が、胸の苦しさに悶（もだ）えたのである。

その手を取って、

「それだもの、忘、忘れるもんか。その時の、幻が、ここに残って、私の目に見えたんだ。ね、だからそれが記念なんだ。お君さん、母様の顔が見えたでしょう、見えたでしょう。一心におなんなさい、私がきっと請合う、きっと見える。可哀相に、名、名も知らんのか。」

と云って、ぶるぶると震える手を、しっかと取った。が、冷いので、あなやと驚き、膝を突かけ、背を抱くと、答えがないので、慌てて、引起して、横抱きに膝へ抱いた。

慌(あわただ)しい声に力を籠(こ)めつつ、

「しっかりおし、しっかりおし、」

と涙ながら、そのまま、じっと抱(だき)しめて、

「母様(おっかさん)の顔は、※(ねえ)［＃「女＋（「第－竹」の「コ」に代えて「ノ」）」、「姉」の正字」、U+59CA、326-15］さんの姿は、私の、謙造の胸にある！」

とじっと見詰(みつ)めると、恍惚(うっとり)した雪のようなお君の顔の、美しく優しい眉(まゆ)のあたりを、ちらちらと蝶(ちょう)のように、紫の影が行交(ゆきか)うと思うと、菫(すみれ)の薫(かおり)がはっとして、やがて縋(すが)った手に力が入った。

お君の寂しく莞爾(にっこり)した時、寂寞(じゃくまく)とした位牌堂の中で、

カタリと音。

目を上げて見ると、見渡す限り、山はその戸帳（とばり）のような色になった。が、やや艶（つや）やかに見えたのは雨が晴れた薄月の影である。

遠くで梟が啼（な）いた。

謙造は、その声に、額堂の絵を思出した、けれども、自分で頭（かぶり）をふって、斉（ひと）しく莞爾（にっこり）した。

その時何となく机の向が、かわった。

襖がすらりとあいたようだから、振返えると、あらず、仁右衛門の居室（いま）は閉（しま）ったままで、ただほのかに見える散（こぼ）れ松葉のその模様が、懐（なつか）しい百人一首の表紙

に見えた。

（明治四十年一月）

底本：「ちくま日本文学全集　泉鏡花」筑摩書房
　　１９９１（平成３年）10月20日初版発行
　　１９９５（平成７年）８月15日第２刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十一巻」岩波書店
入力：牡蠣右衛門
校正：門田裕志
２００１年10月19日公開
２０１１年３月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。